

る結局の正鵠なる單價は次の如きものなる可し。

一層式コンクリート鋪裝	四	2.85
二層式コンクリート鋪裝		2.90

石 鋪 裝 3.30

(本報告に關する實價は田上技師に照合せられたし)

滿洲地方に於ける

土木事業と都市計畫施設 (七)

三 浦 磐 雄

鞍山と諸施設

鞍山は奉天を去ること五十五哩四に位し、滿鐵連長本線中の主要驛なり。鞍山に入れば「漢」の一字を想はしむ。蓋し此の都市も鑛業都市なるためか、其の趣が實際を物語るものあり。製鐵事業の盛衰に連れて其の市街に消長の態を表はす所、撫順と同じうする所あり。聞くに大正六年製鐵所の出銜量年額百萬噸と其の事業に伴ふ人口十五萬を包擁することを目標の下に此の市街は計畫せられたり。従つ

て工場の施設も市街の經營も大規模に企畫せられたるなり。然るに歐洲大戰後經濟界の大變動を來し、製鐵事業も急轉直下に總て緊縮せられ、爾來十數年其の儘に推移し來りしなり。

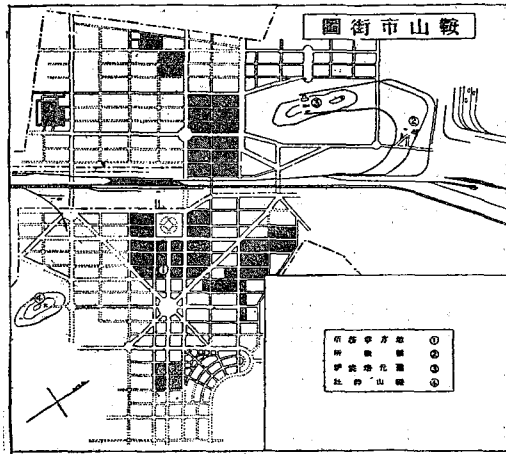
鞍山附屬地は面積六百九萬五千坪、鐵道沿線隨一なりと想像せられし程廣大なり。此内百二十萬坪を市街とし、各種地域に充當し、之に文化的建築を施したるが、居住者の數も減じて、今日にては邦人の家屋の半數は空家の儘放置

せられ居る有様なり。將來の人家稠密を豫想して疎らに遠く置かれたる學校、病院其の他の建築物、等又空地の中央に大なる道路が走り居る等其の廣汎なる都市計畫の痕歴然たるものあり。然れども市民はよく保守的態度に此の大空地を養蠶、養豚、煙草、薄荷の栽培等に利用し居るなり。

鞍山は斯くも空漠の感を催さしむれども、都市計畫上の施設は相當に備へられたり。其の大略を次に記さん。

道路 道路は未完成のもの多く、其の數字的のものを擧ぐるは略すも、舗装としては鑛滓を多く用ひ、就中重要なる道路にはタール舗装を行ひ、其の補修は一般によく行届き居るものゝ如し。

公園 滿鐵直接管理のもの五ヶ所あり。其の面積合計五



鞍山市街圖

十九萬九千十七坪に及びたりと雖、之れ亦未完成と云ひて可ならんか。其の市街東郊に緩き勾配のある所、丘地一帯を大規模の公園とし、ゴルフリンクに六萬坪を充て居る杯

其の一端を知り得るなり。此の地展望非常に良き所なり。

上水道施設 人口一萬五千餘に給水し、施設一ヶ所にして六十四萬餘圓の事業費を支出し、専用栓一千三百餘、共用栓三十餘、切符給水栓其の他六十餘による。消費水量年二十八萬八千五百餘立方米、此の料金三萬五百餘圓、經費として二萬六千五百餘圓を費す。

當地の水道は製鐵所に於ての諸工場に使用するための特殊なる設備を有する故左に其の大意を記す。

製鐵所の用水は現在之を首山と千山川水源より求む。其

の量は一日約二萬五千噸なり。其の外製鐵所構内にては各所に還水装置を設け、各工場の排水を再三循環して使用す。以下昭和五年三月末日現在、即ち銑鐵生産年額二十八萬噸に對する水道設備を參考の爲説明す。

先づ製鐵所の所要給水量を見るに、季節に従つて、又作業の状態に應じて必ずしも一定ならずと雖、大約一日に付新水(首山及千山水源地より供給するもの)二五、七一五噸、環水(新水を一旦他の目的に使用し之にある操作を施したる後、再び又は三度之を使用するもの)三〇九、五八五噸、合計三三五、三〇〇噸なり。其内譯を見るに

	新水(噸)	還水(噸)	合計(噸)
用水箇所			
鑄 鐵 爐	三、六五	四、八五	八、五〇
送 風 機 室	二、四〇	一〇、〇〇	一二、四〇
選 鐵 工 場	七、三〇	七、五〇	一四、八〇
骸 炭 工 場	二、〇〇	—	二、〇〇
副 産 物 工 場	四、〇〇	一五、三〇	一九、三〇
煉 瓦 工 場	一〇三	—	一〇三
發 電 所	五、〇〇	九六、〇〇	一〇一、〇〇

紹 介

雜 用 水	一、五〇〇	—	一、五〇〇
合 計	二五、七五	三九、五五	三五、三〇

即ち新水毎分一七噸八、還水二一四噸を使用するなり。

此の外洗炭工場洗炭用水、骸炭工場消火用水、選鐵工場除塵器等に對し循環水を用ひ居れども之れ等は循環の途中にて何等の操作をなさざるか又は間歇的なるため除外す。是等の用に應ずる水源地設備は、前記二箇所にて、首山水源地は製鐵所を距ること十七料の鐵道沿線に在りて、三箇の湧水地より成り、唧筒を以て千山貯水池に揚水す。此の二池間は一萬八百米の距離に二十四吋鑄鐵管を布設す。千山川唧筒所は製鐵所を去る六千二百米の千山川岸にあり。四箇の湧水井に依り、河水を集め、唧筒によりて貯水池に揚ぐ。貯水池の水は更に唧筒によりて二十吋鑄鐵管二千百米を通じて配水池に揚水す。配水池は孟家溝の丘上に在りて、自然流下によりて給水す。配水池製鐵所間六千米間は二十四吋鑄鐵管を布設す、而して製鐵所構内に来りし新水は、第一鑄鐵爐附近に制水瓣室を設け給水系統の支配點として、配

水池より二十四吋本管を還水装置の給水塔より来る二十四吋本管とを此處に合する如く型る。尙鑄鑛爐附近は複雑なる配管を成し故障に對して萬全を期す。此の外二十四吋管が構内に入りて八吋管を分岐し、機關庫及蒸業工場用に供し、骸炭工場給水に對しては十二吋管二本を分岐しループ式に連絡し、二十吋管を分岐して選鑛工場に達せしめ、更に十四吋管を分岐して鞍山市街水道管に連結す。

次に還水は混藥室、沈澱池、冷却池、機械濾過室、唧筒室、給水塔並に之れ等諸般を連絡する導水路又は鐵管に依りて通水す。還水装置は之を二系統に大別す。即ち瓦斯洗滌機及其の他よりの濁水は混藥室にて藥品を加へ、沈澱池にて夾雜物を沈澱せしめ、更に機械濾過機にかけて清水とし、唧筒室にて給水塔に揚水し所要の場所に給水す。一方鑄鑛爐の爐體冷却其の他の水は溫度は上昇すれども、夾雜物の増加は無き清水なるが爲め混藥、沈澱、濾過するの必要なく、直ちに冷却したる後唧筒室に於て沈澱池方面より

還水共に常に相當の壓力を必要とするため配水池、給水塔等も皆合理的の高さを保つ如く設計せらるゝは勿論なり。今其の給水系統に付きて各部の標高（大連灣海水面より）を示す。單位はメートルなり。

首山水源唧筒	二五・八六	千山水源唧筒	三三・九六
千山水源水池	二七・七七	配水池	六・七八
製鐵所制水瓣室	三三・九八	還元装置第二冷却池	二〇・九六
給水塔	六九・〇九	選鑛工場第一唧筒	四一・五〇
		選鑛工場第二唧筒	六〇・〇〇
		選鑛工場貯水槽	六〇・〇〇

右に示す如く千山水源水池は、製鐵所構内冷却池より約七米の高位にあり。兩池間を直接連絡し自然流下によりて製鐵所に引水せんと計畫を有す。

消防施設 消防隊及駆付消防組各一、主要器具としては水管自動車及機械梯子各一、手押ポンプ三、水管車四等を備ふ。昭和五年中には火災は十四件、被害高約一萬圓なりき。

屠場 屠場一ヶ所、約一萬三千圓の事業費を支出し、約

一千七百頭を一年に屠殺したり。其の料金二千三百餘圓にして、經費として二千八百餘圓を出す。

火葬場 普通火葬場一ヶ所のみなり。約二萬圓の事業費を支出し、一ヶ年百件内外、此の料金五百圓許、經費として約七百圓を費す。

墓地 墓地一ヶ所、其の敷地三千三百四坪、設備に約一千五百圓を費し、貸付面積は今日迄に約百坪なり。有料なり。

塵芥運搬 年約五百六十五萬冠の塵芥を肩擔及馬車にて運搬す。其の戸數約二千八百戸に對するものなり。

屎尿處分 年約百九十六萬立を肩擔及馬車にて運搬處置す。其の戸數約二千七百戸に對するものなり。

運動競技施設 演武場、弓道場、陸上競技場（四百米トラックのもの）、野球場、水泳プール（附十米平方兒童用プール）、スケート場（毎冬季施設）各一箇所、庭球コート二箇所、體育ボールコート（バスケットボール、バレーボール等に兼用）十七箇所を設く。尙鞍山管内には首山、張臺子、

煙臺、煙臺炭坑、十里河、沙河に各庭球コートを備ふ。

名所舊蹟等 有名なる畫像石あり。近年鞍山及其の附近より綠泥片岩に半肉刻にて風俗畫及宗教畫を描きたる畫像石を出したり。其の内鞍山の苗圃より出でたる十一枚は大連に圖書館に、北隣の支那街八卦溝よりの六枚は鞍山中學校に保存さる。又千山驛にも數枚ありと云ふ。此等の畫像石は明代、北宗時代或は漢代なりなど、學者の説は區々なれども、歴史考古學上貴重なる資料なり。尙鞍山附近苗圃よりは甌築の古墳數個發掘せられ土器、古錢、古鏡等多く出でたり。鞍山の次驛に近く、有名なる千山に就いては後段に記述す。

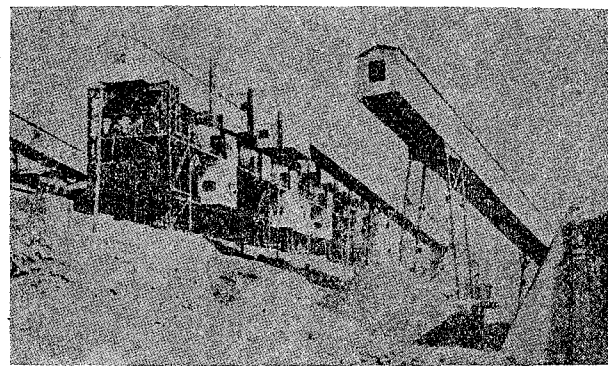
人口 昭和五年十月一日の國勢調査によれば、鐵道附屬地に於て日本人七千二百八十三人、中國人九千六百九十九人、外國人一人、計一萬六千九百八十三人を數ふ。尙附屬地に隣接して中國人約七千人居住すと云ふ。

市内の機關 郵便局、警察署、守備隊、滿鐵地方事務所、製鐵所、振興公司採鑛總局、保線區、中等學校以下、銀行

會社本支店、圖書館、公園、滿鐵醫院、神社佛閣等を有し
交通機關としては鞍山大孤山間運鑛電車、市内馬車、人力
車、タクシー等なり。

鞍山に於ける製鐵情況

鞍山の心臟とも稱せらるゝ鞍山製鐵所は明治四十二年滿鐵地質調査所長によつて鞍山鐵鑛床を發見せられたるに起因す。大正五年鞍山鐵鑛の採掘機關として、日支合辦の振興公司が組織せられ、現在の鞍山製鐵所を中心として約九哩の半徑の内に散在する鑛區に就いて其の採掘權を獲得したるなり。其の主なる鐵鑛山は櫻花園、王家堡子、關門山、大孤山、西鞍山、東鞍山、小巔子、鐵石山、白家堡子、一旦山、新關山なり。其の埋藏量は四億噸と云はる。採掘したる鐵鑛は今日も尙前記の振興公司より製鐵所に供給するものなる



が、此の振興公司是現在當製鐵所に所屬する一課の如き職制に置かる。

選 元 焙 燒 圖

其の後間もなく、滿鐵自身が製鐵業を經營することの認可を得て、將來銑鐵百萬噸を原料として、鋼材八十萬噸を産出する計畫を以て、當地に製鐵所を建設することゝし、其の第一歩として銑鑛爐二基及之に附帶する設備をなすことゝなり
大正六年より工事に着手したり。

一方鑛石は其の埋藏量莫大なりと雖、含鐵量五十%の富鐵鑛は甚少にして、大部分は含鐵量四十%以下の夾雜物に硫酸が多量に含まるる貧鐵鑛なり。此貧鐵鑛を人為的に富鐵鑛となすの研究に依つて處分せんものと努力したり。此の選鑛に對する研究は、歐洲大戰前後の諸種の打擊影響を受けて第二次に廻すことゝし、富鐵鑛の發見に對して、大正八年四

月鑄鑛爐一基の作業を開始することとなる。然れども計畫の規模が大なりし丈、其の反動も甚だしくして「鞍山製鐵所は滿鐵の癌なり」と公稱せらるゝ迄に悲境に陥りたり。之を逆轉せしむる方策としては、原料鑛石の貧鑛なるを富鑛として事業を確實化せしむるにあり。大正九年一月より貧鑛鑛の處理即ち選鑛の研究に専ら意を用ひたり。特に此所の鐵鑛は鐵鑛粒が細微なるが故に、磁力選別法に據るが得策なれども、茲に考慮を要するは、其の原鑛が主として磁力性に弱き赤鐵鑛なることなり。故に赤鐵鑛を磁鐵鑛に變化せしむる研究をなすに相當苦心を重ねたれども、倅にして世界に其の類例の無き一方法に成功し、遂に貧鐵鑛處理に一大革命を與へ製鐵史上特筆すべきものを誇るに至れり。此の方法は鞍山製鐵所のパテントになり居るなり。

此の獨特の方法は還元焙燒爐と稱するものなり。高き直立爐の頂より原鑛を入れ、爐底より瓦斯を送り、途中赤熱に遭ひて化學作用を起し、磁鐵鑛と變化し爐底より取出さるゝなり。併も其の爐より取出されたるものは極めて脆く

なり、之を粉碎して含鐵量五十%乃至六十%の精鑛と含鐵の少き夾雜物の多き尾鑛とに分ちて、尾鑛は放棄す。

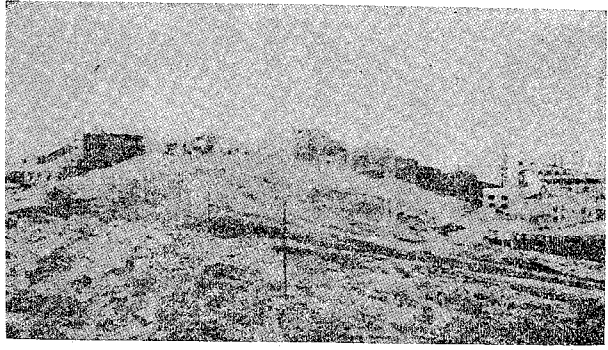
爰に於てか、會社は一千百萬圓を以て、第一期擴張計畫を樹て鑄鑛爐一基を増設し、之に伴ふ各工場の擴張及新設竝に動力、水道の擴張を施し、大正十五年に大體其の工事も終り、次の如き生産能力を有するに至れり。

設 備		生 産 品	
鑄 鑛 爐	銑 銑	鐵	一ヶ年生産能力
選 鑛 工 場	燒 結	鐵	二〇〇、〇〇〇 噸
骸 炭 工 場	骸	鐵	三五〇、〇〇〇 噸
硫 安 工 場	硫	炭	二五〇、〇〇〇 噸
タール工場	タ	安	五、〇〇〇 噸
ベンゾール工場	ベンゾール	ル	一八、〇〇〇 噸
ナフタリン工場	精製ナフタリン	ル	三、六〇〇 噸
耐火煉瓦工場	煉 瓦 其 他	ル	四八〇 噸
鑄滓煉瓦工場	鑄 滓 煉 瓦	ル	六、〇〇〇 噸
同 工 場	セメント	ル	五〇〇、〇〇〇 噸
尙タール工場に於ては	コールドタル、クソオソット、		一五〇、〇〇〇 樽
ピッチを生産す。			

以上の諸設備即ち製鐵工場は鞍山驛の西北二十二町に位置し、面積工場構内百五十萬坪、構外水源地其の他四十五萬坪、銑鐵製造設備に銑鑛爐二基（各五百三十五立方尺）、熱風爐（各三通式、高六十尺）、骸炭爐其の他、副産物製造設備諸工場等あり。之等設備と稍々離れて一小丘の上に選鑛設備として、還元焙燒爐十基、選鑛工場、燒結工場、廢鑛處理設備等あり。尙發電所、水道其の他の設備を有し居るは勿論なり。

年額二十八萬噸に應ずるものにして、原鐵鑛處分能力一日二千二百噸、製品團鑛生産同一千百噸とす。

以上の諸工場の中、鞍山製鐵所に於て最も特色を有する選鑛工場に就きて其の概要と作業系統を略記し、之を代表的とし他の諸工場に就いては餘りに記事多くなる故これを省略することゝす。



選 鑛 工 場 の 圖

原鑛石は主として工場を離ること約十六軒の大孤山より採鑛し、電氣機關車を以て工場内第一貯鑛槽に搬入す。此の大孤山は全山鐵鑛なりと云ひて過言に非ず。早晚此の山は平坦となることを免れざる運命にあり。

選鑛工場内の主要設備概要は次の如きものなり。

- 一 還元焙燒爐設備
- 還元爐（各基能力一日三百噸）
- 十 基
- 二 碎鑛設備
- 第一貯鑛槽（容量約七百噸）
- 一ヶ所
- 第一碎鑛室碎鑛機（各機能力毎時八十噸）
- 四 臺

選鑛工場は三十五乃至四十%の貧鐵鑛を以て銑鑛爐銑鐵

第二貯鑛槽(容量五千噸)

一ヶ所

團鑛機(精鑛、燃料及團鑛粉を混じ塊とす)

六 臺

第三貯鑛槽(二十耗以下槽底より落下す)

一ヶ所

五 廢鑛處理設備

第二碎鑛室碎鑛機(回轉數每分三〇〇)

五 臺

ドアシツクナー(徑三十米のもの)

三 基

三 選 鑛 場

第四貯鑛槽(容量各百五十噸)

二ヶ所

七 瓦斯、水道、照明其他附帶設備等

一 式

ボールミル(磨碎用)

八 臺

次に作業系統に就いて述べれば、第一貯鑛槽に入りたる

チューブミル(細粉に磨碎用)

十六臺

四百耗の鑛石は、第一碎鑛室にて百耗以下に破砕せられ、

粗別用)

六 臺

ベルトコンベヤを経て第二貯鑛槽に入り、ベルトコンベ

コンクラシフアイヤー

二 臺

ヤイによりて還元爐に送られ、出でたる磁鐵鑛はベルトコ

バウルクラシフアイヤー

十六臺

ンベヤイにより第三貯鑛槽に入る。第二碎鑛室にて百耗よ

磁力選鑛機(各機能力毎時二噸)

九十六臺

り第二十五耗以下に破砕せられ、更にベルトコンベヤに依

精鑛機(精鑛、尾鑛を抽出用)

九十六臺

り。即ちボール及チューブ・ミルによりて百五十メツシュ

ドアシツクナー(徑十米のもの水分を減ず)

四 臺

以下に粉碎し、クラシフアイヤーによつて鑛石を分級し、

四 團 鑛 設 備

四 臺

次に磁力選鑛機及精鑛機に依つて精選す。精選せられたる

四 團 鑛 設 備

八 臺

鑛石はドアシツクナー及オリバーフィルターに依つて水

オリバーフィルター(水分を取る)

八 臺

分を減じ、ベルトコンベヤにて團鑛機に送らる。此處に

於て粉狀の鑛石は燒き固められたる骸炭狀の所謂團鑛となり鑛鑪に送らる。ボールミルより精鑛機に行く迄の間の作業には多量の水を要し、此の間の鑛石運搬には此の多量の水を利用す。此の部分の設備が山腹の傾斜を利用し居て階段狀に設けらるゝも蓋し經濟的に構築せられ居るためなり。使用したる水は鑛石中の夾雜物と共に之を廢鑛處理設備に導き、水は夾雜物と別れて再三循環使用せらる。夾雜物は尾鑛として工場外に排出せらる。尙當工場に使用する材料は出來得る限り國産品を獎勵使用せしむる方針に基き内國産のものなり。

一方當製鐵所は總工費九百萬圓を計上し、昭和三年三月設計に着手して昭和五年三月火入舉行をなしたる第三鑛鑪及附帶設備とを完成したり。茲には其の設計基本數字を列べて精記に代ふ。

第三鑛鑪及附帶設備

- 一 銑鐵生産量は毎日五百坩とす。
- 二 製品の標準は次の如きものなり。

硅素(一・五〇—一・八〇%)、滿俺(一・二〇%以上)、炭素(三・五〇%以上)、硫黃(〇・〇四%以下)、燐(〇・三五%以下)、鐵(九四・〇%内外)

三 燒結鑪及鐵屑裝入量 本鑛鑪燒結鑪を裝入するものとして設計せられ、銑鐵一坩に對して燒結鑪一・七五坩を要することゝなり、又少量なれども鐵屑を裝入せざるべからず。此の鐵屑の量は銑鐵一坩に對して約二十五坩にして、量の比より云へば極僅少なり。

四 骸炭比 現在の第一及第二鑛鑪にては、新設第三鑛鑪に比して、燒結鑪の裝入量尠く、熱風の溫度も割合に低く、且つ又骸炭中に多量の水分を含むために銑鐵一坩に對し一・一坩の骸炭を要す。即ち骸炭比が一・一なり。然るに第三鑛鑪に於ては全部燒結鑪裝入なると、熱風の溫度高きと、骸炭の含有水分少き事等に基因して、第一及第二鑛鑪に比して銑鐵一坩に對し約二百坩の骸炭を節約し得るなり。若し假に其の三分の一即百三十坩としても、第三鑛鑪に對する骸炭

量は九百七十坩となり。又粉骸炭の振落し量を四%と見ても骸炭爐より銹鑛爐に送らるゝ總骸炭量は一坩となり骸炭比は一・〇となる故に第一及第二のものに比して第三は有利なるなり。

五 石灰石比 媒銹劑として裝入する石灰比は銹鐵每一坩に對し〇・八坩即ち八百坩を要し、五吋内外の塊狀のものを裝入す。

六 鑛滓量 上述の裝入量より計算すれば、第三銹鑛爐は銹鐵一坩の生産に對して約九百坩の鑛滓を生ず。

七 總括 以上を總括すれば、第三銹鑛爐に對しての基本數字は次の如し。

銹鐵生産量毎日五〇〇坩、所要銹鐵一坩に對し
 燒結鑛(一・七五坩)、鐵屑(〇・〇二五坩)、骸炭(一・〇〇坩)、石灰石(〇・八〇坩)、鑛滓(〇・九〇〇坩)を示す。

最後に此の第三銹鑛爐未完成の時なれども、昭和三年度の精算上の成績を見るに、當製鐵所としては所謂劃期的な

るが故に其の實蹟を示すに

一 銹鐵生産量	二二四、四六〇坩八六
二 製鐵所投資額	二〇、八七一、三一五圓〇〇
三 銹鐵一坩當投資額	九二圓九八
四 銹鐵販賣合計	二〇五、六八三圓〇〇
五 骸炭爐裝入炭量	三九二、四〇三坩九〇
六 硫酸アンモニア	三、九〇二坩六一
七 粗タール生産高	一一、三二八立米七六
八 モーターベンゾール	一、九四五立米七九
九 粗タール蒸餾量	一〇、六九六立米四〇
一〇 クレオソート油	二、七二六立米〇九
一一 ピ ッ チ	六、四一七坩八四
一二 粗ナフタリン	六四一坩七八
一三 精ナフタリン	四〇三坩五〇
一四 硫 酸	五、三四四坩五四
一五 製鐵收入	九、七四〇、五二一圓〇六
一六 製鐵支出	八、五二四、九〇九圓七〇

一七 差引益金 一、二二五、六一一圓三六

因に六より十四迄は當所の副産物なり。

而して昭和二年迄は、大正八年以來毎年製鐵

經理に於ての差引「損耗」のみ所謂「赤字」の

みを表はしたりしが、昭和三年度に於て始めて

差引「益金」が表れたるなり。其の後昭和四年

末より第三鑛鑪完成したるなれば、其の利益

は彌々見られ、採算良好となる次第なり。

千 山

登山の出發點は普通鞍山と湯崗子との二ヶ所

よりなれども、鞍山の方より良し。

秋の千山錦をさらすしかも西の唐錦

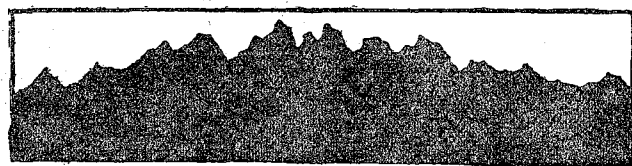
野 口 雨 情

松の風しづかに吹きて自ら世を離れたる所な

りけり

田 山 花 袋

千山の頂のそら岩々のとがりに觸れて紺青に澄む



千山のとがり冴えたり秋今宵最中の月に蟲もなぐらむ

筆 者

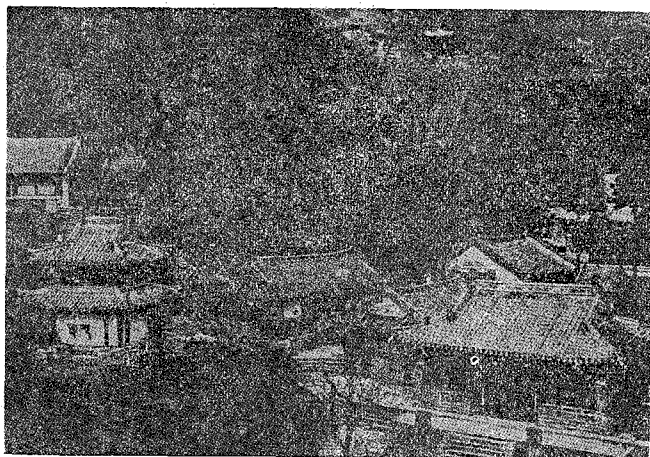
與 謝 野 寛

千 山 の 遠 望 と か れ る 山 並
 千山は湯崗子驛、千山驛附近より列車の中で望
 まる。鋸山式に開析せられたる屋根の續いたる如
 きが、青い空に判然と見らるゝは此の山なり。山
 は外觀の複雑なるに似もやらず、淺けれども、山
 谿と寺觀との諸調甚だ融和し、眞に滿洲の名山と
 して推稱するに足るものなり。
 山としての範圍は東西十五支里、南中北の三嶺
 列び、南に香峪溝、北に考觀峽と呼ぶ二峽其の間
 に介在し、雨季には溪流馳る。北嶺には奇峰五佛
 頂、南嶺には千山中最高の仙人臺聳ゆ。全山花崗
 岩の風化面白く、松柏峰に這ひ谿を埋め、春は梨
 花の白皚々。秋は紅葉の緋焔炎、兩つながら一入
 の美を増す。

溪は四十八溪をなし、ここ幽邃閑雅の境を占む。建つも

の五大禪寺と二十五院ありて名のみも床し。前者は龍泉寺
 大安寺、香巖寺、中會寺及祖越寺
 にして、後者は無量觀、圓通觀、
 青雲觀、普安觀、慈祥觀、鳳朝觀
 、雙龍觀、保珍觀、三清觀、洪谷
 觀、南泉庵、龍泉庵、木魚庵、五
 龍宮、朝陽宮、大安宮、泰和宮、
 東極宮、斗姆宮、聖仙宮、西海宮
 聖清宮、佛爺洞、玄眞觀及劉家庵
 なり。

千山の名は既に唐代以前より現
 はれ、清朝には皇帝の行幸さへも
 ありき。各寺院は皆山林と梨樹園
 を有し、經濟的に自立し、名物に
 酸梨を出す。仙人臺或は千人臺と
 も呼びて、海拔二千尺、頂上に奇
 巖懸り、石地藏數基立つ。其の頂上よりは、全千山一眸の



千 山 龍 泉 寺 圖

裡に收められんも、今は其の頂上への梯子は外しありて容
 易く登るを得ず。

春秋の季、都人士は云はずもが
 な、杖を曳くもの年々に増して探勝
 すと云ふ。

